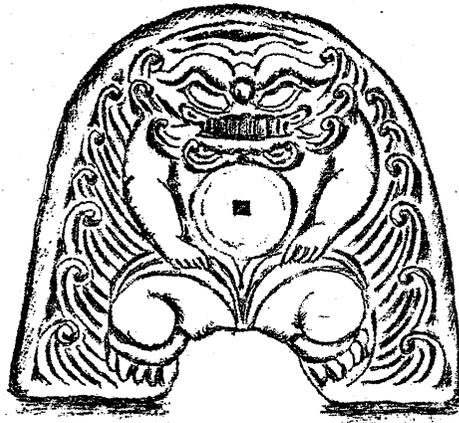


昭和34年度

特別史跡 平城宮跡調査概要



奈良国立文化財研究所

昭和三十四年度第一次平城宮跡発掘概要

特別文跡『平城宮跡』の第一次発掘調査を昭和三十四年七月二十一日より同年十二月十五日まで百四十八日間にわたつて実施した。

今回の調査地域は通称一条通りの北側、佐紀池の東側にあたり、岡野貞博士の内裏推定地の西北隅をしめる一副で、昨三十三年夏三件の現状度更に伴う発掘調査で確認された遺構群の北側を調査したことになる。

発掘調査面積は297アールに達し、総借上げ地57アールの52%にあたつている。この数字は、過去数年間当研究所が飛鳥地方で行つた調査の場合（たとえば、川原寺第一次調査では総借上げ地に対する発掘調査地域は34%、第二次調査では40%、飛鳥板蓋宮跡調査では35%）と比較すると能率的なものであつたことが知られる。後述するように、遺跡は上下に重複したものであつて、本来ならこの52%なる数字はより低いものになつてしかるべきものである。この能率性は、ブルドーザー、ベルトコンベアー、トロツコなどの機械力の併用による大規模発掘によつてもたらされたものと考えられる。

調査の結果、至るところから建物の遺構が検出され、しかもそれらが互に上下に重なりあつてゐるので、これらの遺構造営時期の先後を決定することは困難をきわめた。発掘の結果は、それらの遺構が少くとも七回以上にわたつて造営されたことを示した。仮にそれらにA—G群の名を付して区別し、記述する。

A群——東北から西南に傾斜した沼状の原地形をうめたて、それに一米以上の土盛りを

行つた時期である。この土盛りに伴つて大規模な造営が行われたことは推察されるが、建物遺構は何等判明せず、ただ発掘地域の南端に脊大の礎をならべた幅約60浬の石敷が東西に走るのが認められた。この遺構の性格は究められなかつたが、これをさかいに南では當時の地表は降り、北はさらに高くなつており、それより北方の地域が削平され、そのためこのA群時期の土盛りに伴う他の遺構が残らなかつたと解される。このことは同時にこの石敷が南北両側の境界の何らかの役目を果たしていたことを推測させる。

B群——A群とした石敷を跨いで東西に一系列に三棟の建物がならび、これと平行した形で北に515米へだてて東西に長い一棟の建物があつた時期である。南の三棟は、同一規模のもので、掘立柱掘方によつて判明したところでは、東西五間、南北二間（柱間各約3米、天平尺10尺以下同様）、各建物はほゞ10米の間隔をおいている。最東端の建物は、桁行三間を確認し得たのみで、以東は調査地域外にのびている。この南の三棟に平行する北の建物は、東西十三間、南北二間（柱間各約3米、10尺）のもので、桁行三間ごとに間仕切りがある。間仕切りは調査地域内ではニカ竹を確認し得た。もし、三間ごとの間仕切りが建物全体にあるものならば、西妻一間があくことになり、これと対応して東妻にもさらに一間ある可能性が出る。間仕切り及び妻の柱は、遺構からみると他とは異なり掘立柱ではなく、浅い掘りこみに根固石様の石を伴つたものであることが注意された。この北の建物は南の三棟のうち西二棟のほゞ真北に平行し、対立する形勢を示している。南北建物の面は広い空地であつたと推定される。この南の一群と北の建物が、東にどの程度連なつていくものかは今後の調査をまたねばならないが、その平行性、柱間寸法の一致は、これらが同一計

画に従つて建てられたことを示している。

C群——同一時期に営まれていたと推定される二棟の建物からなる。一棟は、B群の南建物の北約10米、調査地域のほぼ中央附近に位置し、東西三間以上（柱間各約27米119尺）南北一間（柱間約36米112尺）である。他の一棟は、東西二間以上、南北二間（柱間各約27米119尺）で、東限は調査地域外にあるらしい。この建物は、B群南東建物に部分的に重なつて検出された。この二棟の建物は、共に9尺なる柱間を基準とすることから、同一計画に従つて建てられたものと推定した。

D群——今回の調査で検出されたうちでは、はじめに南北に長い建物が出現する時期である。建物は掘立柱掘方により確認された二棟で、一棟はB群南西建物と一部重複して検出されたもので、南北五間、東西二間（柱間各約22米1175尺）である。これに平行して西約24米に他に一棟がある。それは東西二間（柱間各約24米118尺）、南北五間（柱間各約27米119尺）の身舎と、その西に柱間約3米110尺の廂のついた建物である。この建物は、B群南・東建物と部分的に重複した状態で検出された。

E群——D群建物廢絶後、その東方建物中央附近に南北にならんだ掘立柱掘方を伴う建造が行われた。この柱列の柱間各約3米110尺、調査地域内で十四本確認、総延長約48米に及び、全調査地域を東西に分割する形勢を示している。これは土塀の如きものの遺構であらうか。

巨群遺構の後に、全地域にわたつて第三回目の土盛りが行われている。特に、南西土塀（約60種）東及び北では薄い。この土盛りのおこなわれた原因は不明だが、原地形が

南西にさがつていたことからおして、オ一次土盛り以後可成りの地盤沈下があつたのでなからうか。このオ二次の土盛り工事以後に認められる遺構としては、以下の二つが検出されたが、その間に時間的前後関係があつたかどうかは確認し難い。

F群——E群の柱列の西約1.6米に平行して検出された同様な柱列遺構である。E群柱列と同様な性格のものと考えられる。オ二次土盛り工事直後も、その直前とほぼ同様な姿がみられたものと推測される。

他にB群南中央建物の北柱列にほぼ重なつた位置に掘立柱掘方列が検出された。その性格、B群との重複性の持つ意味は不明である。

G群——現在の通称一条通りに平行して、オ二次土盛りに掘り削いた二列の溝とその間が土墨状を呈する遺構がある。溝は部分によつて異なるが、ほぼ幅約1.5米、深さ約0.6米程度。二列の間の土墨状の部分は幅約3.5米である。オ一次土盛り当初の南北分割が、オ二次土盛り以後復活したものであろうか。なお、その南端の下に花崗岩礎石が二個埋没されており、礎石を用いた建造物が近くにあつたことを推察させる。他にこの溝遺構とほぼ同時期と遺物から推定される特殊遺構がある。それは、調査地域の中央北よりにあつた東西約35米、南北約55米、深さ約0.5米の階円形の穴で、中に層をなして主として供膳形態の土師器が発見された。その器形の主たるものは数種類に限られ、数は約二千個体にのぼると思われる。さらに調査地域のほぼ中央、B群建物の北約21米のところ、二個の凝灰岩が発見された。共に約55厘四角で、一辺にえぐりがあり両者をあわせると中央に六角形の穴が形成されるものである。どちらともオ二次土盛り以後それを掘り込んだ土塚中におちこんだ状態で発見

された。

遺物としては、G群遺構出土の土器類が主たるもので、瓦類は平城宮跡の他の部分に比較すると、その発掘面積の割合には少なかつた。他にオ二次土盛り中から検出され、その工事の上限を推さしめる貨幣がある。万葉通宝二枚、神功開宝九枚、不明一枚計十二枚が一連のつなぎあわされた状態で発見されたものである。

以上が、今回の調査の結果の概要であるが、それを通観すると、この地域が平城宮の中興地区の北部に位置して、その一劃を東西に区切る一つの南北境界線に近かつたこと、その境界線以北においてもA—G群にみられた多数回の造営工事の行われたことが知られた。このように建築遺構を個々の形のみでなく組合せの形で、平城宮全体との関連のうちでわずかでも把握し得たこと、それらが時間的な結びつきから考察し得たこと、これが今回の調査の一つの成果であつたと云えよう。これは約30メートルと云う大面積を一時に発掘したことによつてはじめてなし得たことである。しかし、これらの今回判明した一群の遺構が平城宮全体において果していたより具体的な役割については何らの手掛りも得られなかつた。今回の発掘調査が過去の遺跡調査の常識からすれば大規模であつたが、平城宮跡全体からみればわずかにその $\frac{1}{300}$ の面積にしかおよばないことを考えれば、それは更に大規模な今後の調査をまつて、はじめて解明され得る問題であろう。

以上今回の調査についての概要を記したが、これら調査事業の遂行上問題となつた点を次にあげておきたい。現地に事務所もなく、民家に間借りして連絡所となし調査を行つた結果、発掘管理・事務連絡その他調査全般に支障を來たした。オ一は当初発掘地保全のた

めの監視を置けなかつた。この結果現場が荒されることを防ぐ点で不備を来した。現場に事務所を設け宿日直を行うことによつて最も大切な発掘地域の保全が果されるものである。ホニは発掘に伴う使用器材の管理が困難であつたことである。事務所に格納することによつてこれを解決することが出来るであらう。ホ三は今回の調査では雨天の際に十分な室内作業を行い得なかつたことである。図面・記録等の整理、出土遺物の収納整理、計測撮影等が十分に行い得なかつたことである。特に写真については現地で即時現像出来ず、まとめて研究所に持ち帰つたことは撮影結果の確認に欠ける点があつた。

以上の他に最も問題となつたのは人夫の掌握が十分に行い得なかつたことである。事業の性質上臨時の人夫を雇上げねばならず、ために農繁期には最低必要人員の確保すら出来ず、また農閑期においてすら常雇でないために就労人員が当方の希望数を確保することが困難で、このために発掘日数が予期以上延引した。同様の理由で継続作業であるにもかかわらず作業に習熟した人夫を得られなかつた。これら特殊な発掘技術を身につけた人夫の養成が急務である。

出土埋藏文化財は別業のとおり

平城宮跡昭和34年度第一次 調査出土遺物一覽表

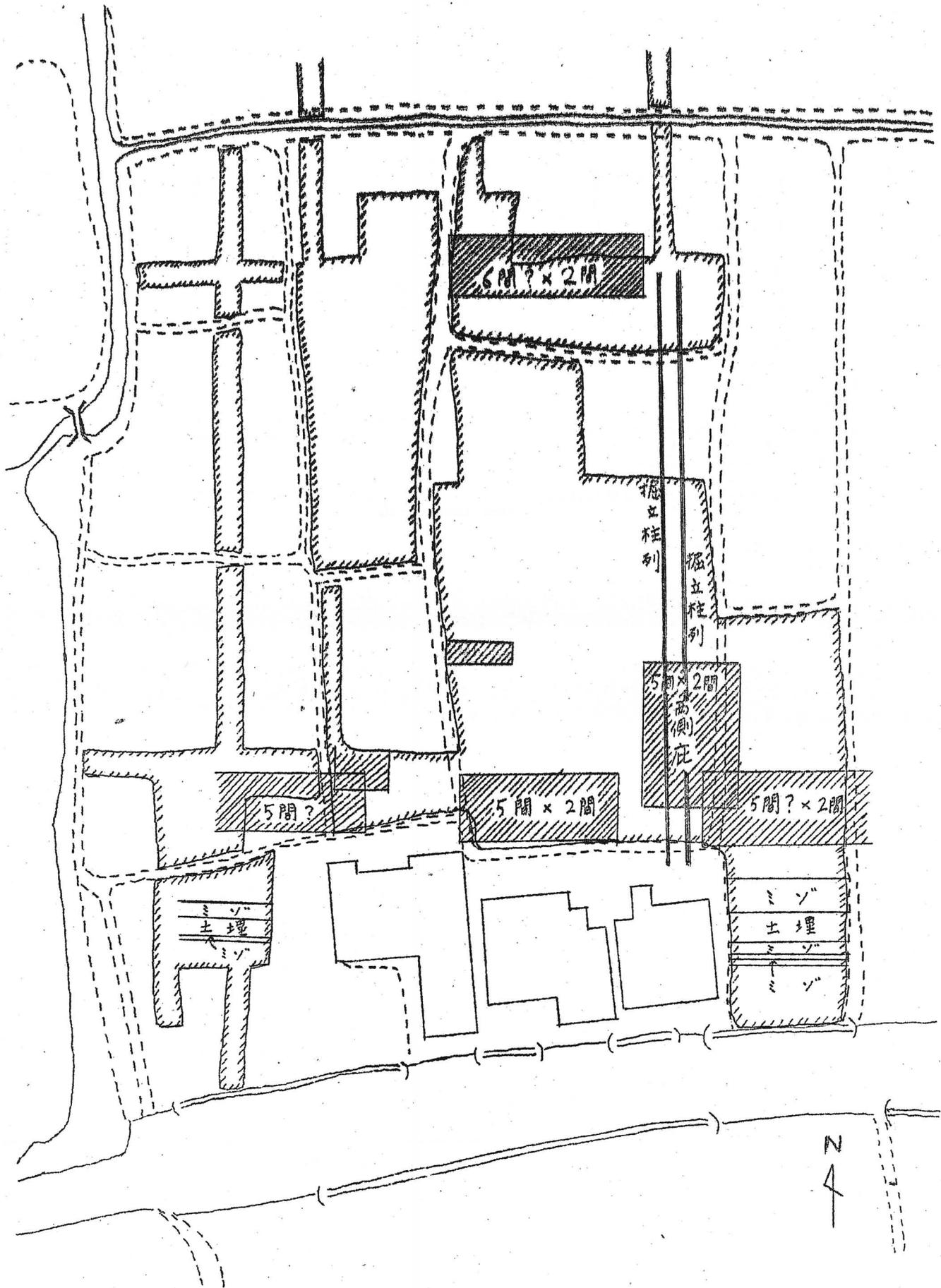
1.	軒	丸	瓦	37片
2.	軒	平	瓦	42片
3.	鬼		瓦	1片
4.	面	戸	瓦	1片
5.	須	恵	器	121片
6.	土	師	器	1862個体分
7.	緑	釉	陶片	7片
8.	瓦		片	23袋
9.	古		銭	12個

内 { 万年通宝 2個
神功開宝 10個

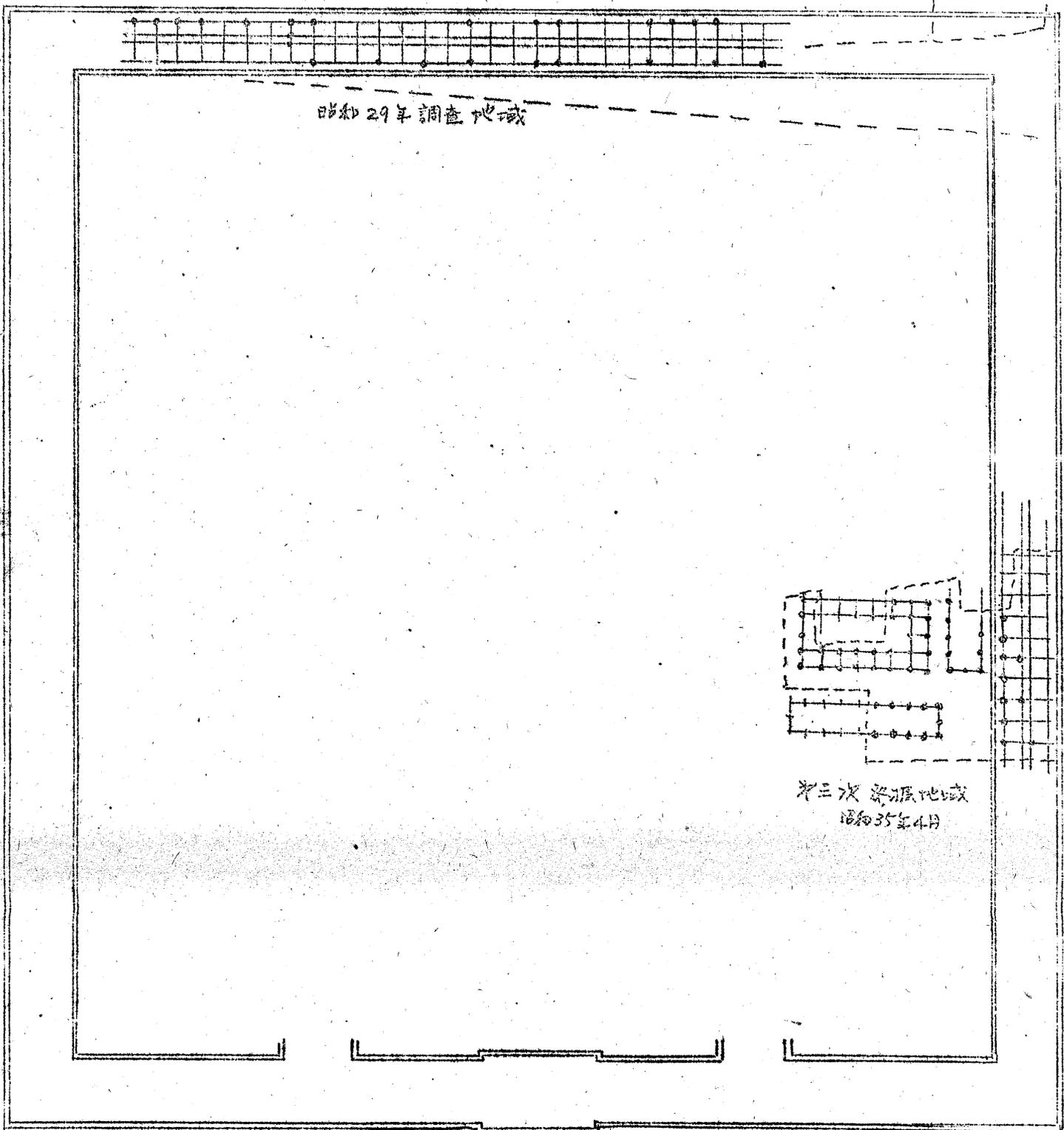
但し、須恵器に「表」の墨書あるもの

土師器に「鳥」の刻銘あるものあり。

昭和34年度平城宮跡発掘地域図

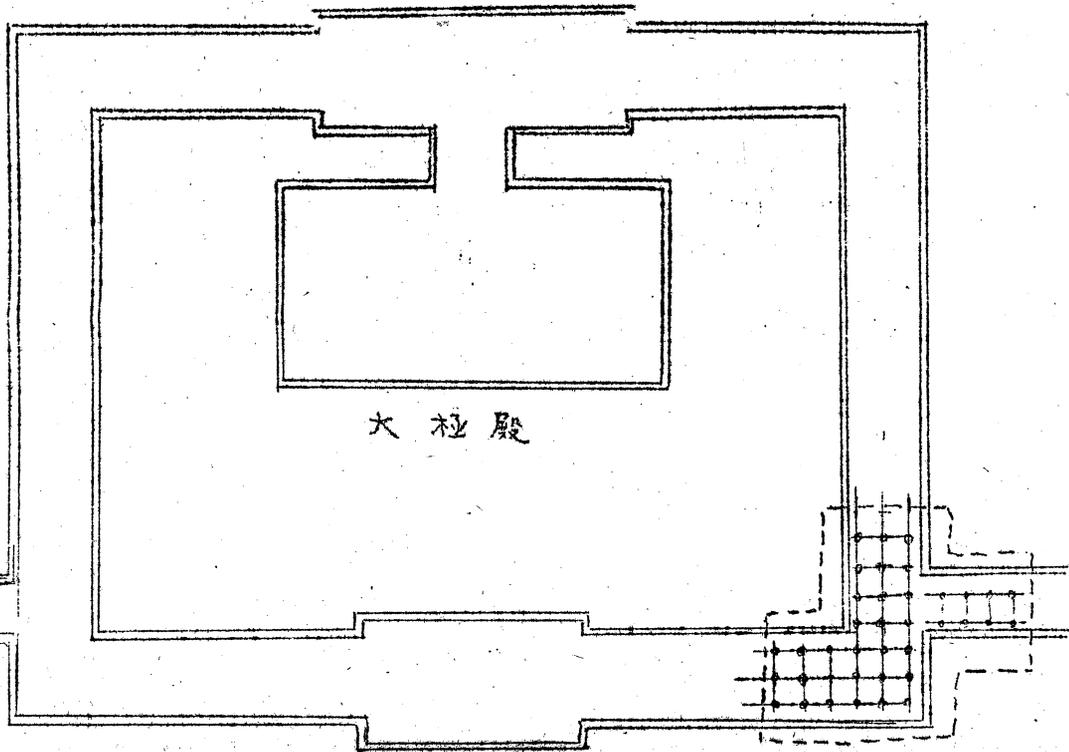
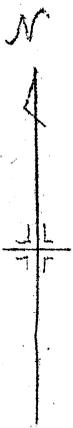


昭和32年調査地域



平城宮跡東區北半復原圖

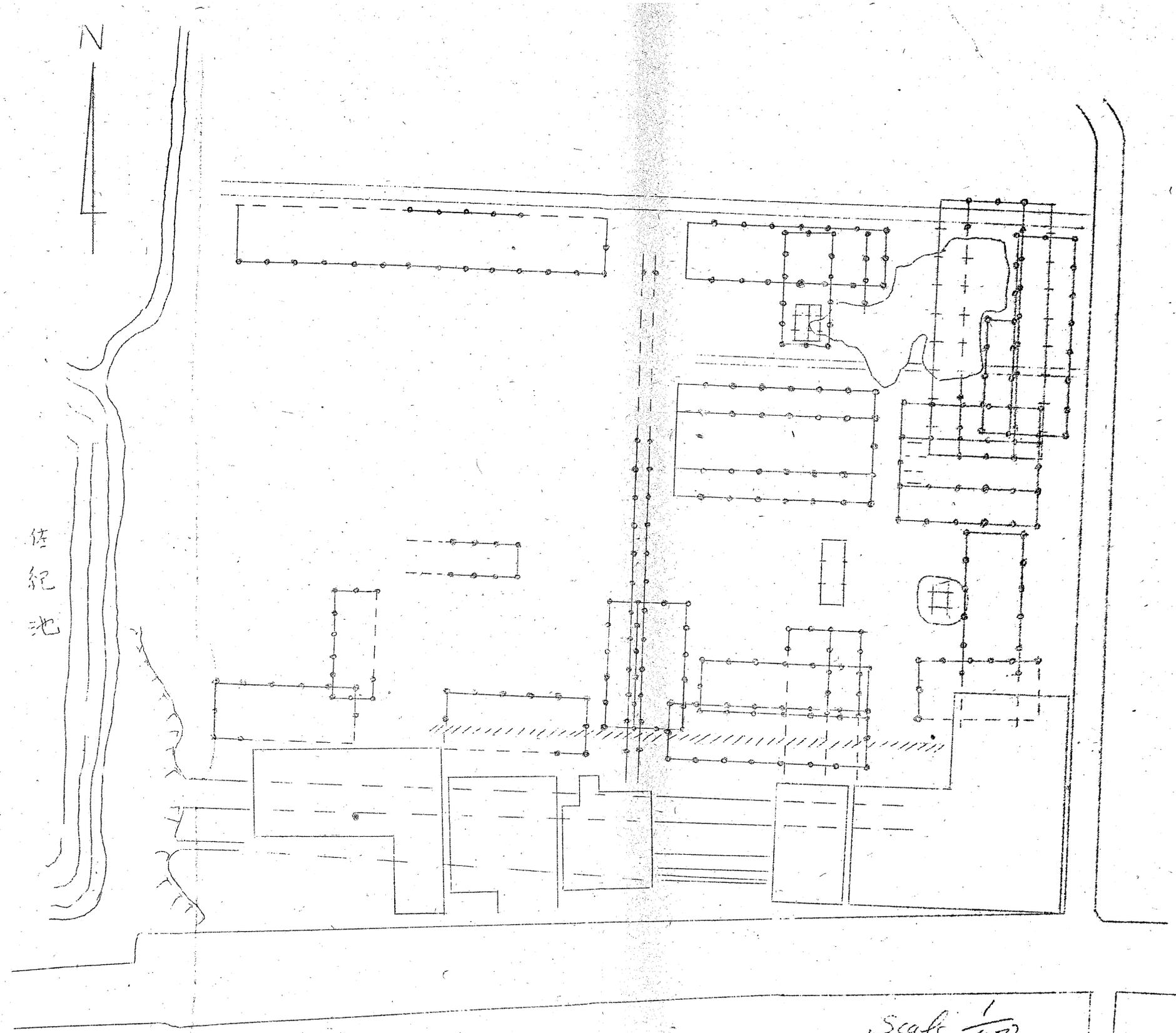
(奈良國立文化財研究所第一次・第二次發掘結果による)



1:1000

第一次發掘地域 (昭和30年8月)

昭和34年才Ⅱ次
昭和35年才Ⅳ次
平城宮跡発掘遺構概略図



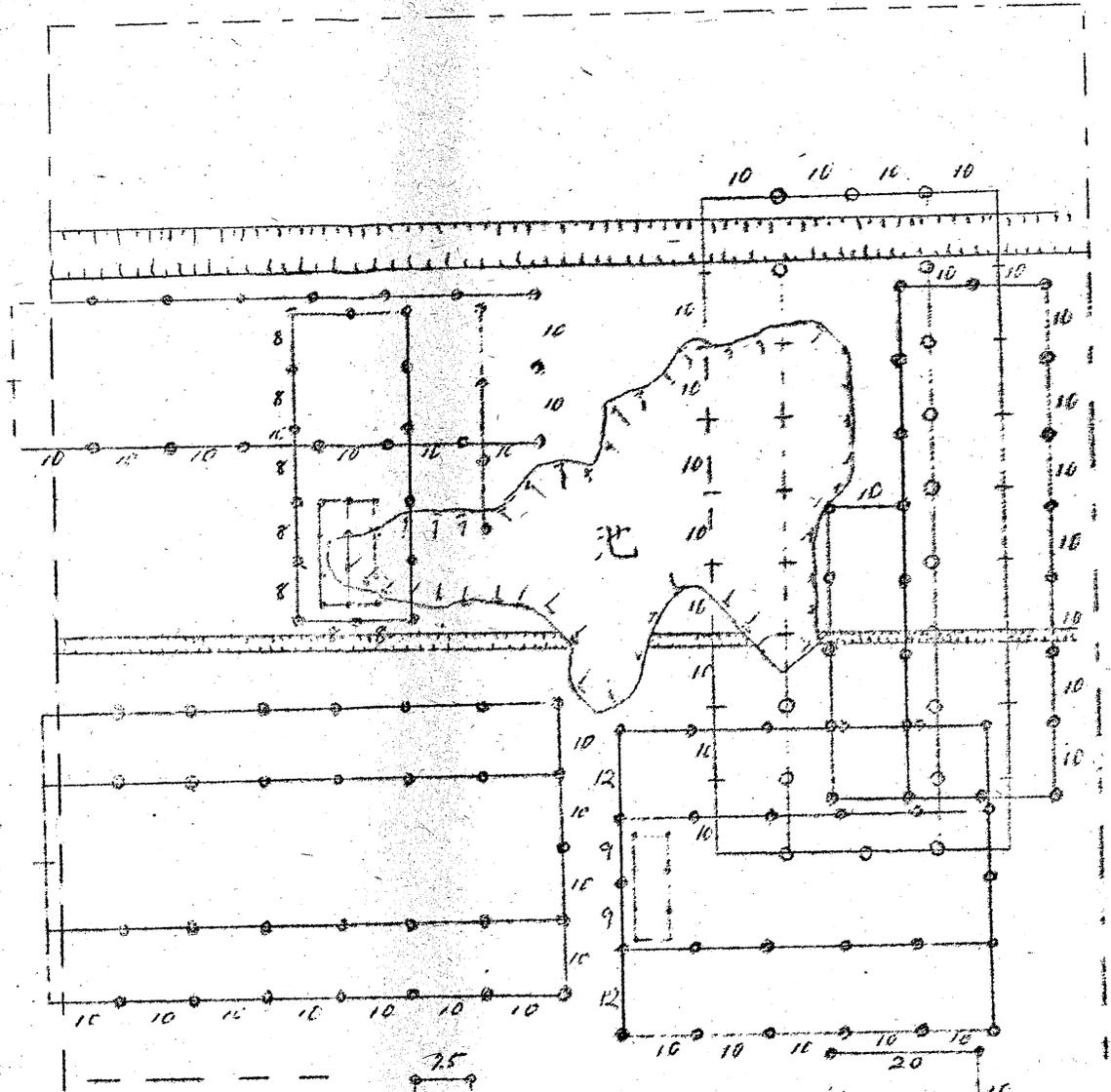
佐紀池

Scale 1/500

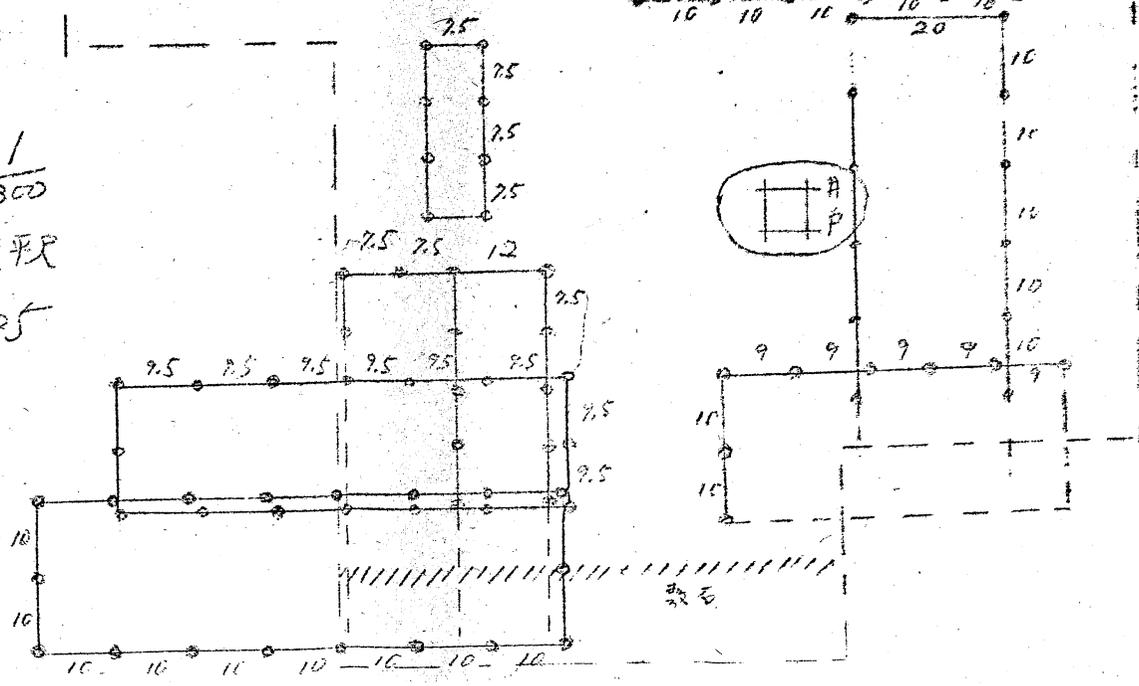
1960.8.25.

昭和35年

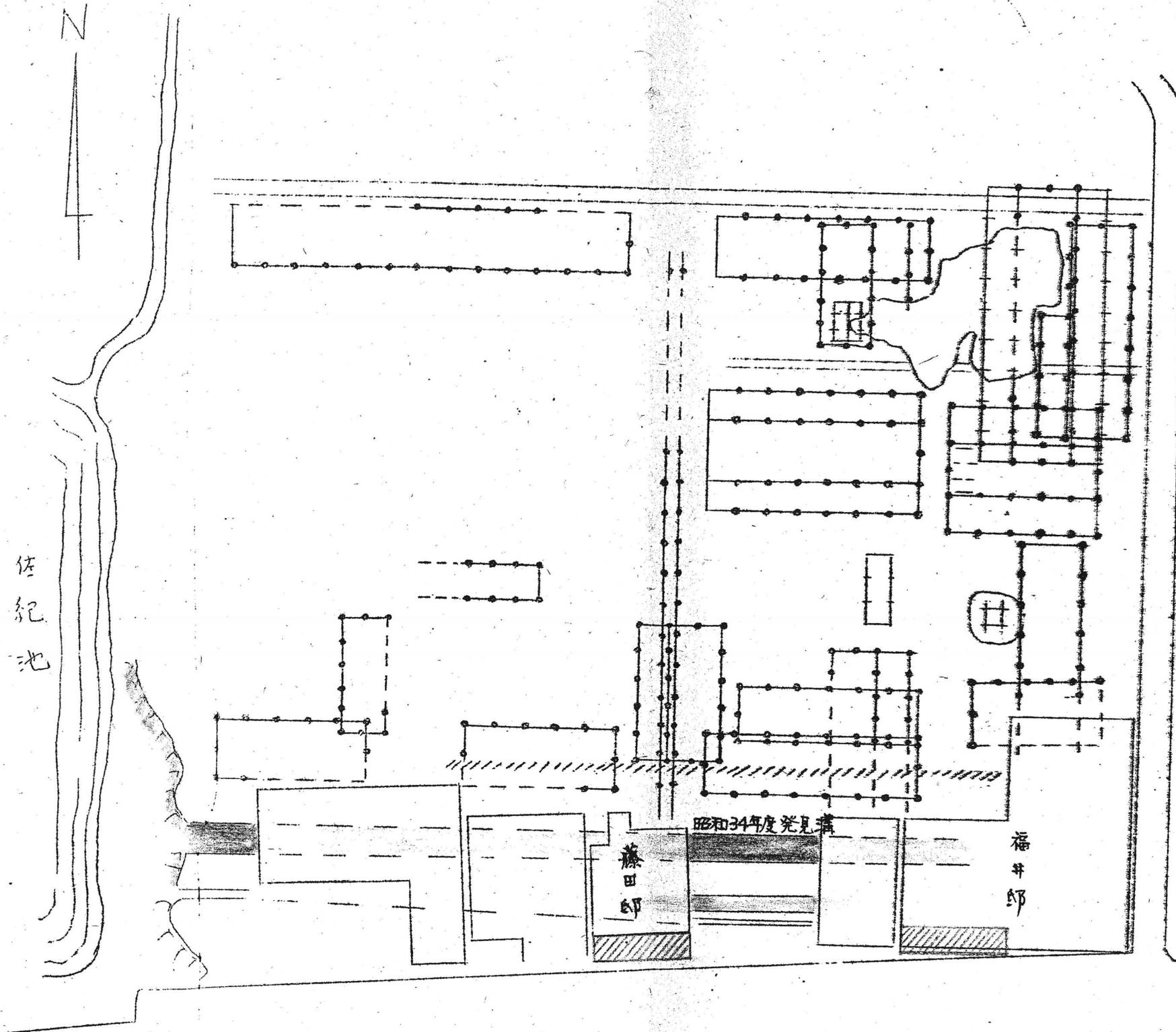
米IV次平城宮跡発掘遺構配置図



Scale $\frac{1}{300}$
 数字付天尺
 1960.8.25



昭和34年才目次
 昭和35年才目次
 平城宮跡茶屋遺構概略図



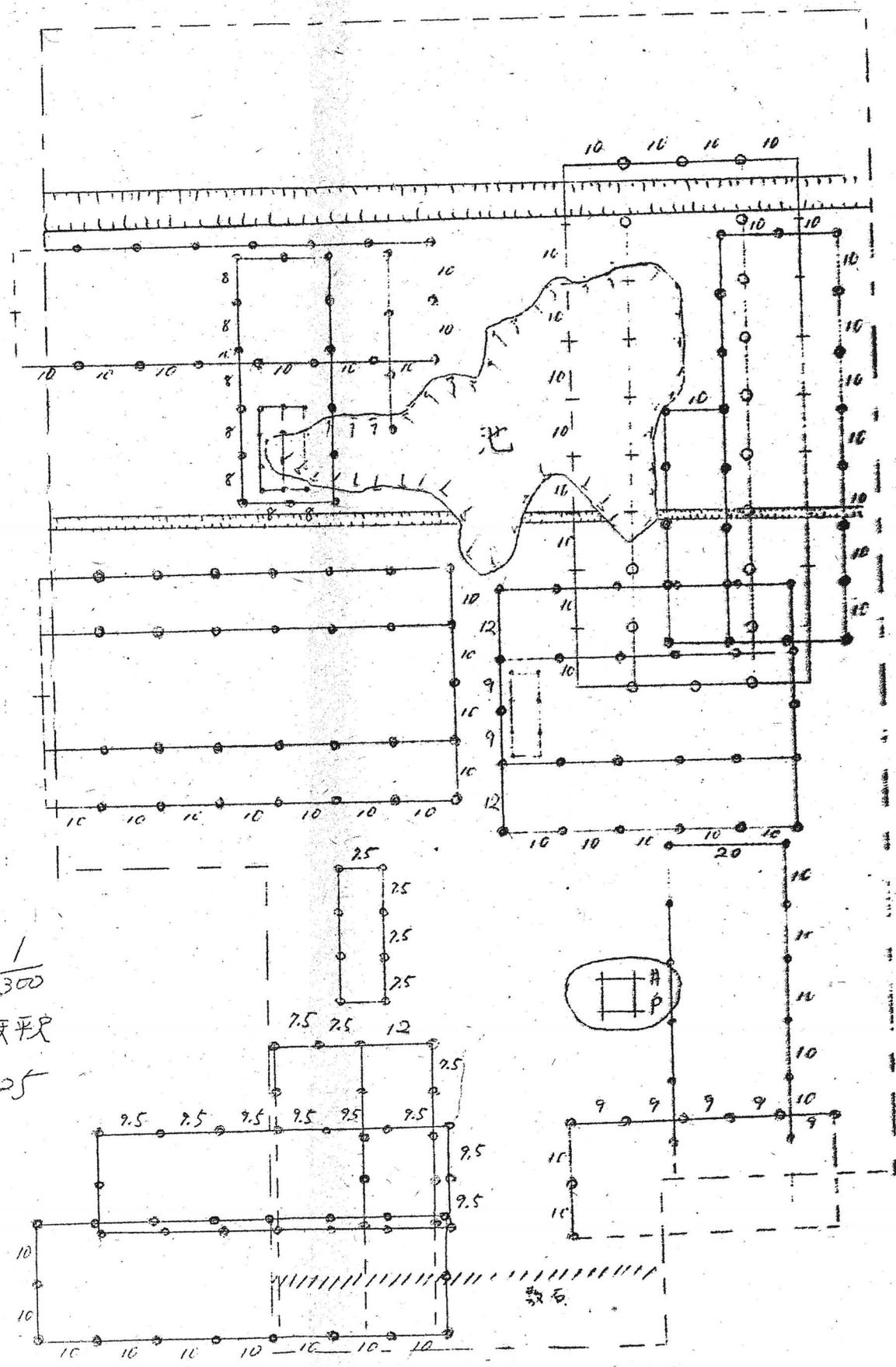
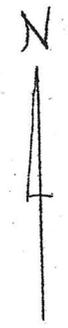
現状変更申請地

Scale 1/500

1960.8.25.

昭和35年

木四次平城宮跡発掘遺構配置図



Scale $\frac{1}{300}$
 数字付天尺
 1960.8.25